

第36回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

正賞（1作品）

○ 天正坦のアトリエ【郡山市】

事務所建築であるが、住宅地の景観にあわせた一つの切妻屋根の下に、緩やかな傾斜地という敷地形状を活かして、床レベルを変えることでボリュームに変化のある4つの空間を内包している。内部は構造要素からディテール、建具、家具に至るまできめ細かくデザインされ、居心地のよい空間となっている。一方、屋外のウッドデッキ、芝生の前庭、植栽等、隣接する住宅や菜園と調和したランドスケープは、周辺環境に配慮して建築を造ることが生活の風景を生み、地域の環境の質を高める力を持つことを伝えてくれる。設計者自身が建築主というステークホルダーの少ない計画であるが、場所性を生かし、建築文化に寄与しようとする姿勢が感じられる作品である。

準賞（1作品）

○ 認定こども園 なこそ幼稚園【いわき市】

住宅地の間を縫う不整形な敷地に対し、形状や周囲との関係が異なるそれぞれの場所にはめ込むように、天井高が異なる保育室等を配置しており、多様な形の共用部や視線の「抜け」が変化のある空間を生み出している。一方、外観はシンプルな形態とし、高さを抑えることにより、周囲の住宅のスケールによく馴染んでいる。LVLの厚板連続構造壁で囲まれた明るくて温かみのある空間が奥行き深く連なり、家具設計とあいまって子どもの不思議の世界を生み出している。震災後の地域の子育て支援の場の在り方について、長い期間をかけて関係者が考え抜いた成果がここにある。

優秀賞（3作品）

○ ふたば富岡社屋【富岡町】

故郷に対し強い思いを持つ企業が地元の復興に寄与すべく建設した社屋で、開放的に設けられた会議室は復興の市民活動拠点となってきた。建設に当たり、建築主の家に代々受け継がれてきた森から切り出した木材を構造材や仕上げ材、家具に至るまで使い尽くし、木の魅力が実感できるシンプルで質の高い空間が実現されている。縦ログ構法、歩留まりの高い材の使用方法等、地元の林業・木材産業の再生のために長年取り組んできた設計者らの努力が結実した作品としても高く評価できる。地域に根ざした企業が復興を支援、推進していることを強く発信する建築である。

○ 認定こども園 りのひら【須賀川市】

シュタイナー教育の考え方をベースに、一つ一つ異なる平面と色彩をもつ保育室、ホール、その他の諸室が、敷地の形状や高低差に合わせて巧みに配置されている。廊下空間に設けられた大小様々なアルコーブ（凹み空間）が子どもたちのよい遊び場・居場所となっており、見え隠れも楽しい。平面的にも断面的にも新鮮な変化に富み、木造の温かみをもった室内空間、上から見下ろしても下から見上げて楽しく、子どもの動きを誘発する外部空間があいまって、子どもと空間の多様な関係性を演出し、豊かな保育空間が実現されている。

○ 南会津町庁舎【南会津町】

広大な森林を有し、基幹産業である林業・林産業の一層の振興に取り組む町の庁舎らしく、多様な地元材の活用の可能性や大工をはじめ職人技術を示す拠点となることを基本コンセプトに、多くの人々の協働の成果として実現されている。内装には場所に依りて様々な種類の町産材を適材適所で用い、特に中央の吹き抜けホールは光の効果とあいまってダイナミックな木の空間となっている。コミュニティの自治を育む拠点として各所に町民の活動や協働の場を設け、また、再生可能エネルギーの採用による維持管理コストの配慮等の工夫を行われており、地域の生活文化に対する想いを形にした建築となっている。

特別部門賞（3作品）

○ 鈴木家主屋【石川町】

町指定有形文化財である民家の解体保存されていた建物を、歴史考証を踏まえて丁寧に修復再生したものである。歴史的建造物の保存・公開として大きな意義があるが、それに止まらず、地域の歴史文化と伝統的な工法を将来にわたり伝える「郷土教育の場」、観光資源等を発信する「情報発信の場」、誰もが集う「まちなかのにぎわいの場」として、観光客が訪れる一方、日常的に高校生が利用しているという、言わば地域の臍となる身近な交流スペースに生まれ変わらせている点は高く評価できる。

○ マイタウン白河（中心市街地市民交流センター）【白河市】

市の中心市街地活性化プランの一環として、街の中心部にある旧大型商業施設を市民交流センターに再生したもので、地方都市における空き店舗のリノベーションの好例と言える。旧奥州道路からの見通しを遮っていた階段室を開放的にし、中央の床スラブを抜いて吹き抜けを設けることにより空間に一体感を持たせ、地下まで自然光が降り注ぐ明るい空間に改造し、幼児、中高生、高齢者等、世代を超えた人が日常的に過ごす居心地のよい交流施設となっている。南側に新たに出入口を設け、通り抜け空間とすることにより人の動きを生み出すなど、街の核として総合的な計画がなされていることは高く評価できる。

○ 喰丸小【昭和村】

公けに歴史的・文化的価値が認められた学校建築の保存ではなく、戦前のごく普通の校舎を、村民の心の拠り所として保存改修したものであり、関係者の決断をまず評価したい。外観を残しつつ、当時の仕上げ材を再利用するなど、補修方法や耐震改修方法、建築基準法への適合等について様々な工夫を重ねて実現した設計者の熱意と努力が伝わってくる。クラウドファンディングにより広く資金が集められ、誰にも懐かしい日本の学校風景を周囲の山並みや校庭の銀杏と調和した校舎が伝えている。

復興賞（3作品）

○ 山木屋地区復興拠点商業施設「とんやの郷」【川俣町】

原発事故による避難指示が解除された地区に帰還した居住者の生活支援、コミュニティ再生のために設けられた施設で、小売店や食堂、役場等の幅広い機能を複合している。地域の復興に対する行政の思いに設計者が応え、その意を受けて施設管理者が運営を行うという、三者協働により生き生きとした施設となっている。円弧状の建物の上に乗る勾配屋根とフラット屋根が交互に織りなすリズムミカルなスカイラインが、周囲の景観に溶け込むと同時にランドマークともなっている。その建物に抱かれた屋外広場はイベント会場として、住民と外部からの人々との交流を生み出している。

○ 東洋学園 児童部・成人部【いわき市】

原子力災害で被災した知的障害の児童と成人の住まう福祉施設である。地元の三和産杉材を全体に使用した平屋建ての内部空間は、入居者を温かく包み込んでおり、それまで住み慣れた施設から出て再出発するのにふさわしい居住環境を用意している。開放的なユニット配置と中庭を囲み視覚的な連続性をもたせた空間構成は、多世代、男女の居住者が一体感をもって一緒に暮らす場として、生活と管理の両面から評価できる。他の地域でも、地元の材を生かしながら、入居者、職員の目線に立って質の高い空間を持つ一連の施設づくりを進めてきた設置者およびその意を受けて取り組んできた設計者、施工者に敬意を表したい。

○ 復興公営住宅 勿来酒井団地【いわき市】

標準住戸プランが示され、街区設計が決められているという条件の中でも、家づくりでなく地域づくり、県産材の活用という思いをもって取り組み、実現した設計者・施工者の努力をまず評価したい。住戸群をはさむコミュニティロードとフットパスの両面に住み手の生活・意識が向くように玄関まわりと縁側を配置し、節目となる位置に交流の場となるコモン・スペースを設けるなど挨拶が交わしやすい空間構成が図られている。1階部分の外壁には県産杉材を積極的に用い、気持ちしが和む住宅地景観を生み出している。計画や樹木に据える巣箱の製作、維持管理等に地元高校生が参画するなど、地域力を育てる取り組みも評価に値する。

（※優秀賞、特別部門賞、復興賞については順不同）